

# World Volunteer in India

岡山赤十字看護専門学校 68 回生 織田杏菜



今回学校の夏休みを利用して 11 日間インドに行ってきました。

旅の 1 番の目的地はコルカタ。

マザー・テレサの施設のある町です。

マザーの施設は町のあちこちに複数あり、それぞれの施設により年齢や性別、疾患が異なります。

今回私は重度の障害をもつ児童が生活する“ダヤダン”と疾患を患っている男女が生活する“カリガート”の 2 か所で活動をしてきました。

施設の決まりで特別な場合を除いて写真撮影が禁止されており、掲載できるものは限られています、学生の目線から見たそのままのインドを書かせて頂こうと思います。



## DAYA DAN (ダヤダン) ◯◯◯◯◯◯❀◯◯◯◯◯◯◯◯❀◯◯◯◯◯◯

こちらでは午前中の活動に参加しました。

掃除、食事の準備、ベッドメイキング、エクササイズ、食事介助、移乗移送、リハビリ等が主なボランティアの仕事です。

施設内は様々なハンディキャップを持った子どもたちが生活していました。

かなり重度の障害を持つ子も含み皆、何らかの理由で親がいませんが、どの子達も“自立”に向けて懸命に努力しているようでした。

子どもたちの中にとにかく歩く事が大好きな女の子がいました。

小枝のように細い身体で私の手を驚く程の強い力で握って施設の中を何周でも歩き回りました。

最初は心配で私も恐る恐るで、休憩させようと思って立ち止まると物凄く怒ります。

再び手を取り歩き出し、スタッフの歌声が聞こえるとキャッキヤと笑ってとても楽しそうで、こちらも自然と顔がほころびました。

会話ができる状態ではなかったので実際にどうなのかは分かりませんが、彼女は彼女の出来る事を、全身で楽しんでいるように見えました。

「彼女の身体はどこも悪くなくて、問題があるのは脳だけなんだよ。

ダヤダンの子どもたちはほとんどがそうで、だから彼女も頑張れば1人で歩けるはずなんだ！」

と、訪問で来ていたりハビリテーションの先生はおっしゃっていた。

そう話している間も彼女は、今度は人の支えなく、ルームランナーや手すりを駆使してしっかりと歩いていました。

どれだけ本人達に自分は出来るんだと感じさせるかが大切、自分で出来るところまでは自分です。

日本でも大切にされていることではないのかなと思います。

子ども達のこれからが気になり後で話を聞いてみると、彼女たちはいつまでもあの施設内で生活できるわけではないそうです。

将来は養子としての引き取りを待つ事がほとんどだそうで、そうでない子は施設内で働くという道もある様です。

養子に行くのなら行き先で最低限の自己管理が出来るように、

施設内で働くにせよ、シスターやマシ(シスター以外のスタッフ)に怒られながらも自分は勿論、後輩の世話も出来るように、そんなルールがあるようでした。

形は様々ですが、あくまでゴールは自立。

それはどの施設でも共通意識として掲げているようでした。

マシの1人に歴30年くらいの大ベテランの日本人の女性がいらっしゃいました。

彼女のやり方はとにかく豪快で圧倒されっぱなしでしたが、でも間違っていないのだろうと思います。

ある子どもの食事介助をしている際、

「あなたはずっとここにいるわけではないでしょ！？彼女は自分で食べられるから！

目が見えないだけだからスプーンにすくってあげればあとはちゃんと食べられるから！

面倒くさいからと言って食べさせないで！！！」

と凄い剣幕で言われました。

確かにその通りです。

勿論面倒くさいなんて思っただけではありませんが顔中食べ物だらけにしながらほとんど口に運べていない姿を前につつい甘やかせていたのは事実でした。

彼らはこれからもここで生活しますが、私はすぐいなくなります。

ボランティアとは少しでも意味を間違えるとただの自己満足になりかねないなと反省しつつ、自分が去った後も継続してその行為が行える様に教育する事の大切さを感じました。



## KALIGHAT (カリガート) ○○○○○○○○○○



午後からは場所を移動してマザー・テレサが最初に作った施設である“死を待つ人の家”へ向かいます。想像よりは整った内装ではありましたが、日本での恵まれた環境を考えると、カリガートを含む多くの場所は匂いもきつく、不衛生だったのが実際です。



全ての町を見たわけでもないので地域によっては異なる点はあるとは思いますが、街中では排泄物、ゴミ、牛、犬、人間、車、バイクなどあらゆるものの密度がとにかく高く、免疫のない外国人は特に水道水、生野菜は口にするのは注意が必要。水周りには虫がいるのが当たり前ですし、キッチンの床にも食べ物が散らかり、ハエがたかっています。やっとホテルで眠りについてと思っても朝起きるとダニであちこち痒い、と何をするにも慣れるまで抵抗がある様な状態でした。

しかしシスターやマシの方たちはともかく、各国から集まった先輩ボランティアも皆、その環境下でも、怯むことなく、笑顔で働きました。

単に慣れなのかもしれません。

しかし自国とのギャップという物の与える影響、特に衛生面は、相当なものなのではないかと思います。

ここで長期間生活し、働くと言う事はある意味修行とも言えます。

私にはまだまだ忍耐力や、人の為に尽くす心構えが足りないなと落ち込むと同時に、彼らの強さ、寛大さに圧倒されました。

そんな中皆、普通に活動しているのでつい忘れてしまいますが、カリガートで生活している人たちは何らかの感染症をもっている方が大勢いらっしゃると思います。

活動中は忙しさを意識していませんでしたが、よくよく考えると利用者同士やスタッフに感染したりしないのかと思いますが、男女別である以外はワンフロアに仕切りは一つもありませんし、利用者同士もベッドを自由に行き来します。

スタッフも自前のエプロンのみでマスクも無しの軽装備で、あらゆる利用者の介助に次々まわります。

“1 処置 1 手洗い” などする暇は勿論なく、仕事終わりにようやく手を洗う事が出来た、というレベルでした。

学校で習う清潔、汚染区域はカリガートではまたとらえ方が違う様でした。

医療現場で働く上で感染予防などの操作は基本ですが、カリガートで働くスタッフは普通丸腰では躊躇してしまう感染症患者の看護も、ためらうことなく行っていました。

これは今後の改善点ではあるとも思いますが、同時に医療従事者である前に、1 人の人としての心構えを学んだとも言えると思いました。

スタッフは皆、目の前の利用者にと誠実に接しているように私は見えました。

病気ではなく病人を診るとはこういう事を言うのかもしれないと思いました。

看護の本当の基本の基本を学べたと思います。



## 最後に…



今回インドに行ってとにかく感じたのは人間の生命力です。皆、本当に一生懸命、体も頭もフルに使って生きていました。ずる賢いと感じたり、「何で騙すの!?’と腹が立つこともありましたが、それも彼らの生きていく知恵の1つとして成り立っているのだろうと思います。

私もまた、その中で短期間ではありますが生活を共有する事によって、生きていく作業の1つ1つを噛み締める事が出来た様に感じます。

恵まれた環境の中にいるとぼやけてしまいがちなかもしれませんが、凄く人と接し、ぶつかり、意見を言い、一生懸命生きた!!という感覚が帰国して強く残っています。

刺激的で、スピリチュアル、それでいて人間らしく、不思議なオーラを漂わせる国での濃厚な 11 日間の経験を、私自身も心の中で完全には整理仕切れていない状態ではありますが、それもまた自分の糧として、これからの人生の中で結びついていくのだろうと一旦はおさめておく事にしています。

ただ現時点で言える事とすると、あのビシビシと感じた彼らの生命力に、私も私の何らかの形で答えたいと思いました。

例えば施設的环境が整っていなかったり、知識や技術が正しくなかったりしても、スタッフ達の精神や利用者との信頼関係ががっちりとしていたのは、人間としての本当に大切な部分の軸がぶれることなく、しっかりとしているからだと思います。

“患者さんの病気を見るのではなく、1人の人として。  
又その方にとっての本当のゴールに向かってサポートする。”

簡単な様で見失ってしまいがちなこの軸を私も今一度肝に銘じ、今後の学生生活や仕事、日常生活に生かしたいと思います。



おわり